「職員との関係性」から認知症症状を読み解く

物盗られ妄想&収集癖

「誰かが私の部屋から大事なものを持っていくんです」と訴えられたことはありませんか？アルツハイマー型認知症の特徴的な症状の一つとして、物盗られ妄想が挙げられます。物盗られ妄想のある高齢者と職員のやりとりを観察すると、この症状は単なる妄想ではない場合が多いことが分かりました。

一つひとつの症状を単純に認知症の症状として捉えるのではなく、「職員との関わり」の関連性を見ていくことで、ケアの実践に役立つ考え方を提案したいと思います。

物盗られ妄想

物盗られ妄想の方の訴えに、皆さんはどう答えていますか？「誰も盗っていませんよ」と答える人がほとんどでしょう。でも、本当に盗っていないか考えてみましょう。例えば、認知症の方が鼻をかんだティッシュペーパーをポケットにため込んでたら、皆さんは「清潔を保つ」または「感染防止」のために、それを処分していませんか？素直に渡してくれない場合、ご本人に気づかれないようにこっそり回収して（盗って）いませんか？

介護する側にとっては汚れたティッシュペーパーであっても、ご本人にとっては大切な「何か」かもしれません。大切にしまっておいたものがなくなるのですから、「誰かが盗っていく」と思ってもおかしくはないですよね。

また、便のついたおむつを他人に見られないようにタンスの奥にしまっている人もいます。タンスの中に汚れたおむつを見つけたら、職員の誰もが「また汚れたおむつを隠している」と思い、こっそりと処分します。しかし、おむつをしまい込んだ本人としては、絶対に人に見られてはならない重要な「何か」が、確かに入れたはずの場所にないのですから一大事です。「何がないのか」は分からなくても、見られてはいけない「何かがない」のですから、誰かに盗られたと感じてもおかしくはありません。

このように考えていくと、介護する側に、「盗っている」という意識がなくても、実は「盗っている」ことは案外ありそうです。しかも、何度も繰り返して「盗っている」のですから、このような状態では、その施設を利用している方は、安心して生活できません。

収集癖とケアの関係

トイレットペーパーや新聞紙などの紙類を集める認知症の高齢者は少なくありません。興味深いのは、自分の部屋に集めたものは決して使わないという徹底ぶりです。使うときには、共有スペースか他人の部屋にあるものを使用するため、職員は「なぜあんなにあるのに、自分のものを使わないのだろう？」と考えてしまいます。

収集癖のある利用者と職員との関わりの関係性を探ると、とても面白いことに気がつきました。認知症の利用者が物を集めると、不潔などの理由がない場合でも、なぜか職員はそれを回収したくなるようです。新聞紙やトイレットペーパーなどであれば、部屋に集めても差し支えないはずです（なかには、集めていても、しばらく様子を見ることのできる施設もあります）。しかし、ほどほどの量では満足しない場合が多いため、最終的には回収するということになります。回収されるからこそ、さらに一生懸命物を集めたくなるのかもしれません。

日用品を収集する理由

その他に収集される頻度の高いものとして、コップやタオルなどがあります。ある高級な有料老人ホームで、タオルやコップを探しては自分の部屋に持っていく高齢者がおられました。見ていてとても不思議に思いました。有料老人ホームに入るということは、それだけの生活水準で生きてこられた方です。なぜその人がタオルやコップに関心を向けるのでしょう？隣の部屋にはなかなか見栄えのよい調度品が飾ってあって、私だったらそちらに関心が向くけれど…と思い、ご本人の部屋を見せてもらいました。そして日用品を集める方の部屋に共通点があることに気づきました。

この方々の部屋は、多くの場合、殺風景です。生活に用いる小物がないのです。